



誹諧古今句鑑

秋

^ 5
1190
3



誹諧古今句鑑 秋之部

立 秋

きのうと水ふたての葛乃葉の梅箱
 秋まぬと悦をれさち物とらと肉一淡
 株きぬとて魚りさると魚の庄宗瑞
 中片の乳地切啼出すけこれ秋沾裁
 と羽秋とさして門掃くとさる外存義
 秋の川や果向ふ州の影強哉雀舟



換投子桐の葉落よ夕侍れ秋 玉圃
をくせし心や妙なる夕翫の娘 木丹
夕々秋乃びと川舟とるおもひが 左簾

初秋

夕月や祝ありとけさ乃つ也 保友
文舟や陰を感ゆる故屋れ内 其角
夕々月やびとる夕ハ舟きむすめの子
秋風乃るろろこねぬ縄もと礼 嵐雪

秋一

初秋や四つさそり乃月の笑 寥和
夕々秋の狂ひくるとも 懶れ 米鳳
初秋や筏へ藤と秋人の歌 蒼狐
暮る夕や風をわくても 神乃秋 栗堂
けつ秋やあはれ 潜する 風の筋 梅邦
初秋や管吹あむ 竹乃 新 瓠舟
夕々秋や故屋ふる夕々一ニ夕々 存義
初秋や思ふ日小沈む 塚の夕々 素人
萩小虫秋のけし 夕々志ほくし 吟松

一葉桐柳

風まよきまよふと桐の一葉が
湯よりふ見えや一葉は落し
なつちをいものうら風の柳ちる
ひとをよひくちるや柳此髪と
泉あのみは院おのり桐ひと
一葉お柳や老と見えく
満一さのふはけめや夜やるま
お柳ちるとも風ハゆるぬとも
望一
岩翁
兔士
心旌
春邦
涼山
順翁
婆百

秋二

落行くや桐の一葉に人こる
軽舟

初月

千秋の楽いいまする
天の戸のそかきものうよこの月
秋もまき二日月おや
象の眼やふそをゆき
初風や月の撓くも三日
を流月やまき細眉の秋の空

巨海
光貞妻
支考
専吟
吳仙
玉圃

二日月ふりく 重月の姿が 宝馬
警みぬ 初月 五 陣

七夕

似ものゝ女夫ふちる也 二つ星 貞徳
夕の雨ふるハ 女夫星 風虎
大切を夜を明ふ 女夫星の 其角
は 奉 杖 握の七葉や 貞佐
秋もまこと七夕の 貞佐 猿 帷

秋三

肌ききけ 先也 早れり 乙 由
七夕やくふ 女夫星 急士
早合もゆるさ 女 鶴 言 者 系 桂 坊
夏より夜も なるすりて 浪 河 蒼 狐
虚伝寺小 燕して 吞 舌 根 涼
月ハ山小 吹け 以 新 也 星 の 意 加 龜 文
月落く 雲よ 糸 なる 小 神 公 雅 邦
志めや 糸 早 乃 女 夫 星 加 小 神 公 雅 邦
敷くの 糸 乃 女 夫 星 加 小 神 公 雅 邦
再かす ぬ 月 糸 乃 女 夫 星 加 小 神 公 雅 邦

今宵独々福も夢に在りて
 世小深まぬ尼の影の白く
 うらみも人間ふあり早と
 水子のみして今宵や阿比川
 糸正く在りて女部一
 と一物も貸さハ振袖早と
 立翠や心向ふ浮々ハ想夫戀
 謙倉や早も山びつハ此竹井竹公曳
 六日之喟

寄井星恋

秋四

又月や六日も乃の夢ハ似以
 首尾告よ早の六日代りハ
 聖霊祭
 生て指くいつまもせし
 まのさくや在りての如く
 冥柳や皆出度くと
 幸か運と花子の持るも
 心は我命るり玉ま侍利
 貞室 季吟 嵐雪 貞室 季吟 嵐雪 貞室 季吟 嵐雪
 芭蕉 柳童

以山不來まて憐しくたま糸心
果菓あゝ小押合のり買ひはく
衣世也帯うこれ著の古短也有
買棚や石片ふと於佛あや平砂
靈棚の蓮の紫風や紙表色、
おく火やひとをいましく灯籠坊、
在すねら舞末を事そ玉糸宝馬
余まのり於家を古き玉まつ全津富
懺約で俺く小家れ買すたり、
買棚や服ふいさやふとねとも雀舟

歌五

水くさ記もの海や玉の信利不言
土釜よ碎けておらの多き糸笠袂
買金 鞆獨
買棚やらういろりの亭にまはる

踊

公家小あゝぬや余のの躍正勢風虎
一也り待人まきまるとりぬ尚白
ととる子や京を娘のまいる蓮之

講るおや恋小丘の物の子の
かりぬや小町ととりつ 付も 其葉
秋もあつと眼も耳もそ 踊うを 樓川
うと愛もかき扇やき流 元 遠波

燈籠

冥途やうらた寺の揚灯籠 京 維舟
言燈籠昼を物うまはけら外 千那
高灯籠墓劫地まはなりり 貞佐

秋六

高灯籠指の秋のまゝ 梵式 蓮之
昼はくく灯籠のゆきま 秋の風 春來
燈籠マ先那の如 正月夜 律富
吉原の灯籠やけ方寺より 遠 不
うらや遠小所の高燈籠 能 言
灯籠やまじくふえて 軒涼し 貫太
俵ゆくやまじりや 灯籠小酌の乾 花籃
燈籠やほのく妹のますく 五璉

同とあつれ小女小

嬉しはる者目なまりて 初灯籠 百萬

祀火

やもく人の律儀小見ゆる祀火が
こまきませて花も紅葉もむ火が
咲ちらひちるとはけい宛のちを中が
言くと物りよ花の玉火のちを

蒼孤
春邦
左簾
操舟

あさつが

柳のよさうしの音も英一き
才豊

秋七

何さあ不也夜を明きるも一そのあ
秋風やそ口くの花の出玉
葉の志不めりや口と見あけ 皺
胡那やいもの葛うう二三子ん
あけうほやうも照つま 月のみ
朝うほやうもめす 風乃秀
何さあ不の猫猫やふ咲く亀
朝うほやうもさうりて 花乃
朝うほやうもさうりて 花乃
柳のよさうしの音も英一き
史邦
杉風
秀朝
沾津
曲菴
心祇
蒼狐
石絲
佐保丸
嘉作共

新のほや雪と彩の情氣を
柳の月夜といとど花の色
あさくふはほめく思ひ人の息
葦や夕アは露とくささ
新島や紫くはひさし
柳新や妹の垣根の志とけな
何さのほや蒼ハちきおれはし
葦小痛くはぬきをひりり
あさくふは露といと柳く
柳白き蛾くもされは
亭
春郊
存義
雪高
笠袂
乙雉
危言
仙里
木丹

秋八

常生苑の花の今や柳くも
何さくふは柳くも
帷月

嵐雪り画小

葦色下子れかきく
也
芭蕉

木 撰

撰花一が川と洞の
乃々の木撰ハ馬小
大坂
空存
芭蕉

蘭

蘭の香也及そぬ人へ逢うる心
物あやハ接きふこも草花宝馬
葉挿く馬髪おもしろか木丹

画賛

草花や一回ふくさる 白の宮不言

萩

古傳所の瓦落てやこれ萩宗瑞
初風へ吹まうれつ萩の世葉之
ちる萩とあ〜と枝のうねりか玉圃

女節花

正よろくと花あやや女節花芭蕉
口ゆき笑やぬむやとくまにし超彼
伯未のあぬも情し女節む心旅
いうちれをゆきと男とくねし一蒼狐

我多ふゆや修けて女帝一花涼城
吹かそ心の多しとるふし
女帝も襟ハ葉花の夢やえる
家ものふもれを淋し女帝花
朔風や花礼しとるふとるふ
其礼

桔 枝

あさふの胡まむれぬ桔花うか
まらかすの丹まかすも 朔とるま
貞知
平砂

秋十

秋海棠

秋海棠西瓜のふふき花し
朔なく秋海棠花のしとる
芭蕉
和莉

鶉 瓦

鶉瓦や夕日の裾とひとる
一寸
芦英
坡

瓢

瓢箪や夏と極めろ生れ甘吐風

三界唯心

百千りや夏一節の片も海をこ 千代尼

蓮寧花

蓮の葉や花ても口一他の才尺 牝

蓮乃実ハ増々もちるに花^かる危^か 芦^か本

秋十一

釈迦如来

蓮の實ハ花と事りふら節外旧室

蕃椒

そり子おもいみちら一ふ危重うし 椒 蒜

まててもそりまものそ ちき 銭

一畠人せら一やたううし 六 窓

もきどうにほせる 秋や 窓 紙

西瓜

西瓜の瓜を安達る瓜と此は
渾沌の言や西瓜の目利を
山蟻

残暑

秋もまゝ臘残りしは 暑られ
相の葉も中く落ぬあつさ
片し籍の何さる残暑 暑うか
如竹 由
常路

秋
十三

虫干の残る暑さや 襖の傷風舎

秋 蟬

蟬啼や七月前乃 節季作京 暑人
日々〜 日暮るる形 暑うか
入相と片くくぼくし 秋を〜
日々〜 日暮るる形 暑うか
と暮き日も 暑うか 秋の 蟬
白 五 百 吳 朝 人
龜 璉 萬 朝 人

蜻蛉

遠山や蜻蛉はいにゆきついでるよの秋の坊
蜻蛉の聲をかくる西日のなほ荷
せんほろや花あきたもとの枝に波
蜻蛉や花あきたもとの枝に柳花
えんふくやもあきも眼を細うせは
暑き日の今さあ際も赤蜻蛉
さよとそを際ぬ日和也赤蜻蛉
とんほろやつよ節をる間人者
伴富

秋十三

虫

十のり飼てあそまけ虫の夢 貞室
行ぬの捨たな記と一のうゑ 鬼貫
盆道て雲間とくく 出乃声 加賀 万子
まのま虫 細い虫と啼に 万 来山
かみも日ますせふ成ぬ虫の了急
虫きくや突るあ社の下を 起 波
雨晴くまじや月夜に室の勢 梅 寿

まろまろふまのま肥ぬ葉をけ
月の奥も酔うけけけ生の声
胡蝶吐玉と振るんじし色
今又不同悟む夜や虫の聲
花のあけ竹かき切か裏り
左 帷 月 水 尾 平

虫撰

花言れ撰後さしし 出のし急 貞室

蚕

秋 十四

ま心月也餅とまきるまろく
年寄れれと寄もかきを寄るす
灰汁桶の糸やまろりまろり
赤貝すまろるまろるまろる
居 用 呂も物入れてけり
曉や灰の中まろりまろり
月乃おや石まおて啼蟋蟀
嵐まけあのおまろりまろり
夢中も夢の内おまろり
只心も啼や寄れれまろり

角 月 北 水 固 淡 ちよ 鹿 夢 木 丹

扇圍扇立

凡の扇ハ忘れ立まぬ扇可な三大坂政
扇立メアとちれなな待也吐風
子訓一も仇るれ誰が持巻扇伯幹

扇立メアとちれなな待也吐風

扇立メアとちれなな待也吐風

編妻

編つる也京編とむ正細乃若立圃

いさる妻也京編とむ正細乃若立圃

編妻一保さぬ傍のやとりか不角

編はま也京編とむ正細乃若立圃

いさる妻也京編とむ正細乃若立圃

いさる妻也京編とむ正細乃若立圃

いさる妻也京編とむ正細乃若立圃

いさる妻也京編とむ正細乃若立圃

いさる妻也京編とむ正細乃若立圃

いさる妻也京編とむ正細乃若立圃

稲妻の影や響く舟のいろ 井
 曳尾
 いささまや文字を扇踏まてよ 曳
 いざ僕了や十は坂本の人歌と 左
 稲妻や建りても竹並障子 一
 いささまやわかごとく心はくそ 山
 稲妻やちくそと池の水 融
 秋もまゝ稲妻よ夕月か 芝
 稲妻や何れも記謝りく 存
 いざ片また歌子と光るれ 而
 いざくまゝ古杉燈の電の色 仙
 里

秋十六

稲妻やまゝと思ふ寸頭の毛 五
 梁
 沖の帆小武庫の稲妻うつり危 一
 音
 稲妻乃裾やほろく風の蘇 笠
 秋
 いざくまゝふんきて泣きし 濡
 佛
 玉
 圃
 稲妻や月入法つ雲と 裂
 百
 桂
 方
 いざ片まゝ赤きりあそぶれと 秋
 方

或智識の志めし

如是我聞

稲妻や二反めふるる 丸
 木
 橋
 白
 袂

稲

早稲の香や素湯ふ吹こ山朗
涼貸満くて畔こゆる稲の穂波が
素山阿波静く糸稲の葉入る面
寛之移既産きあり夕日乾
雀舟新~~~~く忘せてもきものかしけ
左簾

麻好る鳥驚

秋十七

露

後初の露汁也多おと
津宜田舎も細工人のま鳥おと
玉圃雨風も老まま長くか
素登白露は雪ふ別なれま
とら梅翁まら露や浮世一糸五重ほと
柳翁胡島や指ふをさするうほの山
蕭山白露やおもて淋くえて茶
蒼孤

満る時為てえさや草の露
 胡ハ目不生珠をこし猶我
 使晴のを免て涼し家の玉
 志るもあや何は二片ても
 何し草の露小の心な
 白露や起り行妹の庭
 胡あや人の枝嫌の玉
 虫の音と盛らげて亀草の
 法の露瓢箪形り小又結ふ
 互端やあ露しき茅とけ

秋十六

降るハ草昇るとあめ
 思案して葉をこねれり
 草の露くまき人乃
 白露や平名ハ園の引り
 降るハ草昇るとあめ
 思案して葉をこねれり
 草の露くまき人乃
 白露や平名ハ園の引り

胡露や川とささる
 心月あふかされぬもの
 晴て行方代栗
 箱根
 祇
 心
 乃
 空
 庭
 祇
 心
 乃
 空

鶴啼て里法告我や秀此海 蒼孤
川旁やあらし進りける馬乃息 北平
勢了夜の明らけける枯葉此 宝馬
秀と海の遠方漕行小舟引 宝馬
既まらるや地路ゆく言れ嘆をい

相撲

却るを信すしと危 角力此 本来
上手不と名も優劣也 角力此 其角

秋十九

角力此並ふや秋のうら 嶺 嵐雪
悟けあはれ男を勝し 角力此 材種
負、角力名のるものなりいふを 心 芳
倫言ハ汗乃ちめや相撲 取 心 抵
陽物ありて静なりとをまひ 花 雪
終角抵をふしれぬ死を待 吳 夕
関角力人同をそよむあり 公 曳
子と抱く行司ふを川口比 存 義
夜角力やあらし進りける馬乃 李 克
引ふれお撲や時のをまらち 左 簾

子とらふ外弱とく強と脊負投 蛙 色
夜角力や元はくは各々月見山 如 雷
遠余は小抱角力此笑顔うか 平 砂
大物を大國とて其軍角力 津 富
天地に心と運ふとまひう那 花 跡

八 朔 八 朔 梅

八朔也我理ふ衆出す梅 花 超 彼
番也秋も今宵俄く園の梅 羅 人

秋 七

八朔やまきれく庭おもひ出く 左 簾

鶉

一羽ハ何まり尾もなき 鶉 外 貞 徳
原州を洛外と分け鶉のな 仙 法 尼
粟の穂と又よる時や啼らら 交 考
かいまゝくころも寐ぬの 鶉 外 琴 風
迷懐と啼りハ鶉の丘うら 蒼 狐
夢也花の千々情晴と 朝 鶉 花 雪

色とまふかろき親の勢が花跡
初声もたもの切なる勢うか
今起しとまふとめぬうらうか
雀郎

美鳥 小鳥は

己ら名の口しうりもは後で初未得
むし勢の風アアおる縄よか
勢勢よまひと川おく水の止古旧室
川せもや雷尖る岩の角梅壽

秋
九

むくきの雲と群行メアが貞川
まきれわたり初と虹の橋呉龍
並松やろり小鳥哉秋乃久市仙

雁

是後や平砂の層乃あらし書正重
酒賞小ゆくを兩夜の層ひと角
層夢て又一幕入るれおらあ雨桐
湯舟もふけや層れほま是貞佐

油灯小天井併し雨夜の序 春来
 油越てまゝに干ぬおやなまに 佐保丸
 初序戸並つて笑くハ情以事 十代尼
 水影や声迄小序れなおもひ 栗堂
 序啼やあゝうら悲 悦む時 貞知
 湖や一眼小小田と芦の 序 龍昇
 厂鳴く心も秋小定まぬ 素竹
 親子おととまゝゆるもらう 厂の声 吐鳳
 初厂やまゝくほのふとハ如空 曳尾
 雁啼や響て流くしあまの 川 津富

秋 九二

夕狩ぬ色くあゝや汐の 序 雀舟
 圃初く見ゆる序や刈田 面 百挂
 序啼や涙おもまの 京たより 太布
 月子酒初くく序を呼 夜かな 技辞

木 急

木急やおもひ切され昼の面 芥境
 木急よ其向をくも秋のくれ 花菱
 木急よ其向をくも秋のくれ 花菱

木老ハ鳥の噪ハ小胸ハ色ハ龜ハ素ハ玉

鹿

むいと啼尻ハ色ハかなハ一夜ハの麻ハちせハ絨
草ハの山ハまハきハきハとハ麻ハのハすハりハとハびハぎハ其ハ角
啼ハ麻ハとハ狢ハの本ハろハちハふハえハりハとハいハ太ハ来
遊ハ上ハてハ尾ハ上ハ小ハすハくハむハ麻ハ此ハ声ハ北ハ枝
麻ハのハ喜ハふハ人ハのハ顔ハえハるハ夕ハアハ式ハ一ハ盤
啼ハよハりハもハ可ハきハ一ハ麻ハのハ眩ハのハ時ハ直ハ水

秋
九
三

麻ハのハ色ハ心ハくハ角ハハハかハりハとハとハくハりハ乙ハ由
鹿ハのハ尾ハやハものハ淋ハきハじハろハ向ハ立ハ志
麻ハのハ喜ハやハ麻ハのハ喜ハふハ一ハ夜ハとハあハ之ハ夜ハ百ハ洲
八ハ月ハのハ麻ハハハあハむハむハくハ姿ハ何ハ馬ハ光
遊ハハハ耳ハのハ外ハもハ落ハりハ麻ハのハ声ハ十ハ代ハ尼
何ハとハくハとハ夜ハのハもハもハらハやハ麻ハのハ声ハ蒼ハ狐
月ハとハ連ハれハてハ從ハ昇ハるハ声ハやハ峰ハ此ハ麻ハ龜ハ文
夜ハ危ハふハきハふハあハらハやハ麻ハのハ聲ハ春ハ邦
真ハ山ハのハおハくハきハはハゆるハ一ハりハ此ハ玉ハ馬
半ハ足ハのハぬハ女ハ麻ハのハ面ハやハ面ハのハ音ハ玉ハ圃

小窓ハ寒けとさし麻のこゑ
眼小えゆるものより言れ麻の声
人訓し麻さし素衣の夕月
素月

新酒 除穢

我もし新酒ハ人のさめやとき
酔くして君子の味ハ新酒が
らゆなき銭のくはものゝ濁る酒
嵐雪
呉々
葵々太

秋 廿四

秋風

秋風の口古似る戸萩乃喜
何くくといはるはまきくも秋の凡
峰風の吹くより竜人れ教
十壺子も小粒ハなれや萩の風
ちくくなが麻刈込のあきけ風
かつくるとかけ初る齒や絲乃風
たせ紙茶を何よるれと秋のこせ
後あてや背ハかゝる行旅のこせ
季吟
芭蕉
おまつら
許六
越人
杉風
踏通
専吟

秋風や秋玉塔乃持りし 訪 雅郊

西中教寺より

西風や何そ自力の扇ぎ逢 梅翁

悼

塚も動け我泣急き娘の風 芭蕉

野分

世分して鹽の雨ときく夜うら 芭蕉

小承女や世分し向ふくえ 芭蕉

秋笠

艸も本え人の勢あれ世分 羅人
むつし〜 花のや世分れ 栗堂
草ハ皆常むろとけの野分 貝

花野 草花

あろなの百姓馬や花野 公史
悲く小入日れ残るを花野 杜谷
下部を松く破ハぬを花野 乙雉
高よよ露もまこ干ぬ草花 素推

西賛

秋のせや小町の掃首をちりり

蒼孤

宇治花園

花をよや今をむくく此物さる

其架

芭蕉

いほくぬ雪のそせ秋や月夜

三信

舟と帆となり風をそせ秋

一晶

衣と紫や老く小町やき

雀郎

秋共

も。月ハ芭蕉と破秋白又秋群長

芭蕉 尾花

ねとろろさ急るわんえぬ芭蕉

暖裁中の淋しを括る芭蕉

八月の降るを勤く芭蕉

中庭のたまさう道や花を芭蕉

むくせや月乃樂屋の花芭蕉

吹そ吹く風の笑阿と芭蕉

芭蕉 涼山 水

花よくと夕日何ら上尾を
たや花乃徒ひて危いと
積子出て我を和くる
牧ある方小旗せし
約持や牧の尾花の波事
ト人
宝馬

萱の穂

芦の穂やおやらと鳴よハ後
芦れ穂や系ね上段
鼠雪
文州

秋
廿七

莢花

いらくと強る暑や
大莢乃穂小出乳戸荒
宝言

蕎麦花 新蕎麦

肌をきけい
新蕎麦や太刀七刀も
惟
来

うゆくとうるゝてわし苔麦花 蒼拈
新花はや物ともしんんそ一物 旧室

草

多てかりー松茸やまの 腰 重隆
くはせや松の支ぬの 一粟 洞泉
松茸やまのぬまの葉れるうり付 芭 蕉
初々けまきこり敷ゆる秋乃前 一

秋 六

茸抄や鼻の先ふるあかこ 干 角
松茸や都小ちう記山の形 惟 然
初茸や一つ小麿ひとひつ 水 園
茸抄や所ふちある人の妻 石 絲
茸うりや尋るものちるぬまの 紀 鹿
松茸や誰に夢ひー破洲より 吐 風
花も笑うて木の子とひるを指しおれ 羽 貫
茸抄や旅よりあらし越ぬ山 桃 水
はと習ふ盛久ハ誰き茸抄 洋 富

梅 燥

残る葉も梅の枝にちぎ戸 梅 燥 加生
梅もどけ月も葉もをし花も子一 春 朱
白く月雪はらやなき 梅もなき 玉 圃

放生會

魚も夢のうらハ笑ひに放生會 羅 人
鶉ハ射ても捨なきを放生會

秋 廿九

月

皆人の昼寐の種也秋の 月 貞 徳
月戸のうらぬ我乃二つを新法作 梅 翁
いさく花も今春此月一輪 貞 室
園を急よる音文ゆく次廣の月 貞 室
大さの月ともめて一七十一 二 任 口
月や人の心とらねる 恙 乞 姑 同 加
十日のもち三日月あき今 吾 外 京 室 方

朝の花ハ見ぬ里も何りも此月 西雀
 父をを酒の母が更けふの月
 秋もも折月折鳥ハいつも 啼 鬼貫
 月ハげき音ふをけて何れと何
 月一ろや昔のを手はる乃浦
 ちおく人と休むる月見 外 芭蕉
 月子一折ハるを折れり
 あの中ハ静縁かきさし宿の月
 月々音高悟き暑ささし来ぬ 沾徳
 更やうと見定れ夜ハ夕の月

秋此

雲摺や室少もむと月客 去来
 名月ハ海も此月山も見以
 うま色ぬころや月の十三夜 素堂
 名月ハ耳の上ハ松乃 新 其角
 名月ハ居酒のまむと熱うり 其角
 考られて猿の歯ハ一峰の月
 名月ハ耳の山ハ眼のくもを 来山
 を侍きの系皆うつれ月己が 支考
 山寺ハ弟搦不と此月夜 越人
 とき福ハ吐てゆる月夜ハ子 一髪

仕合な岨の松うれふれ月嵐雪
 名月や雀伸上れ小松糸午竿
 池底花さし入る月糸世一
 名月や礎うちこむ浪の隈後雪
 影て深る山と晒をやふれ月乙由
 妻ハ山海の笑ハや帯ぬの月六く雪
 二月月乃相親あり十三花菫之
 名月や丸木ばしらの床安き柳居
 名月や親ハ菊白乃人通己窓和
 ちとハ高をふよの月又望れ月

秋世

名月やいつううー海の浪屏風春来
 名月や親て丸かく人こころ心粧
 名月や帯ハ菊木とかくともあ
 函懐小供ておとさむ秋の月
 いささの月や月の桂の影をく巻
 名月や凡はくろえて花すき希因
 夕つらり外の月出るころ外罷入
 何くこれ空に月乃北見て七
 いちを以や妻と亭ふふ日一客
 刈て後とくくや田毎に月見外桂坊

名月や晴て夜ハ秋のあそびの月 雅郊
 鳥啼夜のさしやふしの月 寛藤
 月今宵帳燭を立もくし 素藤
 名月やうろれさるる松のあ 吐鳳
 名月もかきとふり月夜は 曳尾
 月見とや月見ぬ人此舞うさ 北平
 城の静ぬあ月子静ぬ夜と成ふ危 沾我
 名月や寐とくの鳥鳴りの静 呉言
 舟とけし萩半や碓小町の月 存義
 犬と寐猫と急やまよれ月

秋三

いちまのやまけしハ晴るさよの月 左藤
 夜更入さしまうく存の月次し 宿郎
 物不よし月さあさるる月 何来
 箱刈て手足伸とや門の月 小
 新しや月の今宵の竹れ露 素南
 名月や古き静寂ハ胸の芳 平砂
 古川も水の流るるや存の月 素芳
 名月やこくし思ふし眼のかをみ 素人
 月満りや香を人をもく心 素人
 露白き刈田の茎や後の月

名月や扇拾ひ——待乃 中 言
 名月や氷らぬ氷 ぬゆふ 難 跡
 名月や一枝おほむ 糸多かり 十 教
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 乙 外
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 群 長
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 宝 馬
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 津 富
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 夜 一 喜
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 名 把 菊
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 各 聲 我

賦
 盤

月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 京 花 跡
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 鶴 一 喜
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり い 一 喜
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 十 三 夜 百 菴
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 十四夜 鬼 貫
 月おほむ 一枝おほむ 糸多かり 平 砂
 中 秋 月
 何のよと見えたる 今 看 外 ぶら
 見えよう—— 福 妻 不 と ち みの 月 意 塔

関羽賛

帟くろく鬚毛穂小出て秋乃月 曰室

十三夜

前小勝川糸乃足北長月也 羅人

羈 旅

今るる月るる小夜の之を 山 素井

良月半の夜月ハ思きく俄くあけくふ

ひくもや糸さくかけて 月も暈 何来

陰叢さの傍九列一越とそまきく

松書も持人や世と旅の 月 呈 秋

秋 卅五

礎

ほきく初あふよきと奥 坐 友 凉 菴

拍子末乃徒城外や小 庚 礎 柳 居

床よの礎あふなくの 礎 古 挂 坊

啼あふて松ある宿北まぬる 古 紀 迭

法しは硯小寄くちぬあふの 乳 蒼 孤

初夜の風後萩の小るや 礎 貞 加

一床是二宿さめても 礎 雀 邸

月しろや衣ふりたるそりれ 島 津宝
秋ふけて都も夜くれ 磁うな 露 水
糸のこゝろ寐ぬとがもくとをまひり 沾 凉

あるき志のちとて

中の間小森ぬ子義人小お 磁 其 角

る別

香さハ磁びー々 猿ころも 柳 居

菊

歌 六

黄菊きくきくそ外の名はうくもが 嵐 雪
山路の葉 野菊も又遠ひより 越 人
糸ものち菊ふちん 顔 徳 野 坡
上子出て 滅きくなり 菊のそりれ 青 莪
長きもの蝶くともまきき久らむを 木 児
蛇の来く 梅の香あり 菊 花 涼 帛
菊ハ黄ふさの之飾ぬ 白ひ 式 蒼 孤
かくれおの菊も寐て 咲 起く 咲 栗 水
大輪小考とキくえくそと 雨の 菊 堂
ういろひー菊小夕日や 向ひ 真 知

ちり菊や月ふかくれぬ花の父
 我虫の好くハ合然花葉作り
 其造作不百姓の菊咲子くう
 合茎の露よ黄菊乃掌
 空あとおほさぬ菊の行義か
 白菊く露の風情そやことわら
 ちり菊や地わらう小咲ぬる
 盃之花一くしの菊えり那
 弱く外すくなまき記そ菊乃宴
 白きものちりをふ阿方作己菊

龜文
 龍昇
 公曳
 吐風
 一巴
 吐風
 色波
 鯉賒
 干外

秋世

酒ふくめ葉はく山乃川の裾何来

皇陽

夕奈成て菊似ふとおもひ危
 八葉菊やくふ九日とわらうきめる
 老くくやくふ乃と初心葉のほ
 きく海や一アんはくの雛れ教
 此と何つて盃忘せむくふ乃菊
 望きくも傍既足ても菊そく雲

二水
 茶狐
 雛絲
 木丹
 蒼孤
 方山

子とく一なりくく
 白雨降るハ

年既京葉おちろく威京下危京蚊足

何事も勝むとく思ひ心のちりほくん

まける乃もくもくもものや葉人心心心社

函心贊

移心ひあ勢心の襟心もや心れ菊心素竹

栗心ど心ぢ心

空栗心の心落心て心花心々心石心佛心者心有心

秋心世心

迷栗心や吐心き拾心と心笑心ひ心う心け心笠心秋
い心栗心や心悔心く心く心も心笑心顔心を心し心雲心風心
落心栗心や心出心小心葉心の心朔心ち心け心芝心

紅葉

福毒心の心夢心ハ心け心り心初心紅心葉心茶心孤心
さ心る心福心ふ心年心家心の心幸心れ心も心ら心外心楼心川心
晚心涼心の心掛心り心ぬ心比心や心し心る心糸心李心趙心
う心き心ふ心り心や心入心面心存心の心思心も心み心ら心道心橋心

あゝももろ 嶺 不 勤 阿 巳 伴 富
胡 紅 紫 新 阿 巳 阿 巳 他 淺 一 芦 皓
村 ももろ 老 木 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 白 龜
濃 ももろ 地 再 以 茂 山 踏 阿 巳 貫 太

葛

淋 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳
阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳
阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳
阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳

秋 九

枯尾花

怨 一 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳
又 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳

秋 日

坂 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳
上 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳 阿 巳

秋もさやほく元て山ささけ
 野坡
 板葺や秋の小鳥れあまき
 落梧
 板の空尾上の杉とさるれし
 其角
 秋の雲をさるや秋の雲
 夫叶
 千塔翻もほのちくや秋の夢
 貞屋
 持ぬ小蝶の夢あり苔清水
 栗堂
 秋室し御々出と舟の何の
 松水
 日の秋や南天の雲は影さるし
 而桂
 病後
 何とやら心も弊り老の秋
 支考
 秋平

虎西賛
 嘯や千里の秋も雪は脚
 梅郊

秋父

弊ぬくさるとはさる半はる秋の雲
 一時軒
 おまの危浦の心はをれ秋の雲
 一秋
 枯枝小鳥のさほとさる板の雲
 芭蕉
 秋のくれ石山寺の静
 此側
 鼠
 立出さるさるや秋の昏

うき人と又口説又むし秋の言
 悲ふなりし酒振とむあきれくれ
 蘇もくた月を細まゝ言れるる
 岡釣のうらみあや秋のこま
 青海や津黄ふがらとて秋の言
 朝しれ帝き成やとて秋の言
 秋の言肥くも男色くも
 夕くまそつともあまも秋の海
 秋の言如房の志慮見せけり
 ままとせりてるると秋の夕アガ

秋里

肩癖とねてとむし秋の言
 言語くく晴さへ見えぬ夕アガ
 掛ものごとくもきもちや秋の言
 次广の浦の糸よこの庭や秋の言
 行燈とせほさぬ内を秋の言
 日も入り急月も出た秋の言
 心ざり外よものちし秋の言
 ちつくと物違ふ言秋の言
 鞠垣や梅と足ても秋の言
 生葉の葉けとて秋の言

孟志 蒼狐 須傭 公曳 蝶夢 宝馬 木丹 佐園 乙外

秋の日は花をりもろく暮の静
玉圃
惜るも一樹もあつた也梅の暮
百桂
暮る日の晴るも淋し秋の空
色我
流ひととどきおもしろく秋の暮
作涼
暖の氣をて却も秋の夕アが
伴富

西行

秋をけ法師の夕アうれ
梅霜

自西渡

あちろむけ我も淋しき故の暮
芭蕉

病後

秋里

角力とる心ふなりぬ秋の暮
尚白

母の才まうとくるか

稚子やととと飯ふ秋の暮
一

秋夜

とるるなる唐茶も秋の暮
梅霜
秋の夜と奇麗しと吐し
芭蕉
去き我と心氣を移して旅床に
鬼貫
初夜と口つらしと小秋に危
来山

秋ひととて終るにちの建てありぬ我分
 と川とてありぬ如瀬の別き哉
 秋の夜やぬとけくる人の 膝 一 胡 及
 物乃夜や家と板戸のせりくき 岩 蘇
 芭蕉茶乃せりろ小をき月おが 芦 皓
 秋の夜や知れとや勝せぬ我えろ 平 砂
 風をちや月小の喜言 玉 圃
 簾爐のいときた夜や 女 紫 石 桂
 西よりや尾花月おは薄明己 其 礼
 秋の夜やぬとけくる隣者 田 機

秋 聖

待 恋

犬啼ハも其かや園の月。橋川

夜 寒

入麴の下禁付る夜をが 芭 蕉
 行燈小蟬の遠小夜をきき 梁 山
 床言ふそ侍の夜をきりな 梅 郊
 ある由も夜をき京父や犬の夢 春 郊
 井干の味小字はとある 黄 井 玉 圃

雨中吟

川面小楫ふる声此秋を
仙化

秋雨

青多ハ尾をのよ 初 初 其角
其こハ何もの秋枕ハ秋の 雨 貞山
むら雨やいつも降れとも秋の 古 羅 人
志くくし何系ハ秋の日窓り 古 祖 徳
相の葉ハ耳ハ秋の雨の香 一 巴

秋 罌

露時雨

推の葉ハ盛らましてハ秋時雨 南 羅
菊ハ香の物ハ片く白ハ秋ハ 希 因

混合

軍場ハ嵐ハ遊ハ川 古 葛 系 季 吟
為ハまきハ人ハ遊ハ人 暖 磯 の 結 梅 盛

せせ泊や角あ髪の上子歌
 芋の菜や小雨ふ神とかき合せ
 さしけ飯妹ら垣根を荒く色
 二百十日一日やふろろあ
 父教や秋を扇ふのきり
 燕白ゆりかきれい
 木樨乃花の香強しあ上
 太刀魚や水もたまらぬ
 りともかきとや秋ゆく花の中
 とき續くあの後庭戸
 雲
 北平
 花城
 素盈
 孤舟
 左簾
 把菊
 存義
 百万
 伯幹
 味
 伴
 宿

秋五

唐柜や田舎とて菜も
 淋しさや夕よ出てもかき
 月廿もりの出ぬうら
 月影の田ふまをる也
 推の實や十日くれ雨
 きりつとと茎うらぬと
 喜よ啼やかきも水の
 久しさに形の栞よ
 料理場の又菜や今
 青梨や花の帯ゆる雨
 北平
 花城
 素盈
 孤舟
 左簾
 把菊
 存義
 百万
 伯幹
 味
 伴
 宿

大伴西兔の三弦

さまことしも冷し虎と猫の皮羅人

秋 雜

飢し厚の命と珍小為種 式 去 札
露小虫又月く花野の乞食が 蒼 狐
おもひ合ふ作うか減や酒と菊 心 祖
秋ふるる今とや月の 花 急 公 曳
ほろせハ野ハ花露よ秋の 虹 平 砂

秋 異

北國杉柳の比都子と粟根とらふもく傳ふと
三士のとひくく小

都さし雲の粟田やひえハ秋 支 考

猿 函 賛

猿くとりま玉母の園小盗しして 旧 室

悼

ちろこふす葉もさるハ菊の家 雀 舟

牡丹 餅

萩々花蒼な粉の方や女帝を 百 菴

暮秋

行秋やよと廣げたる粟のいり
乙由
心往
夕のま行秋や見おくる峯の麻
柳意
又言もほしく九月二十日か
熱口
行秋や大根白き京の川
花跡
蟬啼る芥も朽まむ九月尽
丸室

秋四七

行秋の山際もくく夕アうか
宝馬
鴨川のあ一筋うゆくマ秋
洋富
行秋や烟已終りかつと電
花跡
淋一さも今又名残言の秋
松架
何心と所あぬ日和戸言の秋
漁光
古ひくも松の青き毛言の秋
行病
春長と初昼とく色く北の秋
木丹

誹諧古今句鑑 秋之部終

附録

秋之部

一陽井素外

今朝秋の立伸て危州の蔓
初ものよ桐の蔭を禁れまき
えつ秋とえろ月夜や三の
兄初ハ知月の時よ阿の川
系ふるもの夜羽の張河
親あれえん川も娘案早の

秋哭

川越を禪子向よ是あを以
速火や客ハまろ一秋は原
天物や瓶の浅きり孫の辞長
靈祭妻の悪癩も何せて
也ト一火小清きり危多の月
只びね踊くの父まはれ
秋もまき糖き言やむ行後
世葬や床起る我子ハ目眼ら
あさる母の初ハ枯葉さくを危

蘭のむきをすくく人よ白ひくく
床よさきと旭や蘭の新法
ぬきとてはきも惜まうるの萩
強くぬ中ふちくくや凡の萩
秋の暮てくくくうな 暑うな
ふと傳ふもさく道く 暑うな
虫指の袋指行ふ萩きく
きりくは晴や下部の萩 像く
写神の影くく中ふか
法ともふかくくと肥せ萩の萩

秋
四九

白萩や並てまきりー夜明く
やとー火いかにさくものちり凡の萩
菊小丸よ略夜生けー萩の玉
恭平の世に後飛や角力とり
勝角力汗け一人ふ拭せく
日暮入て奇萩をそやけり香
川せらや底よそ見ゆる 後の又
ともー火もまよくならぬ厚の声
厚啼や淀の萩萩萩らく
里まよくあかき萩の萩

帝麻の敷きく宿小兩戸を
淋さのかさうそ見ゆ月麻
白中れ波吹らする分分
胡蝶の合ぬて場も花中うを
花野をきて料もる月の小川
一もとろそせぬや凡象の脚
心とらと居や芭蕉ハ破き星明
きとらふもて青じし花とら
風重や跡ふたし記とれ落
板形の上戸にらと危符ぬとら

秋
辛

日毛西の急くあろ花月と音
月足るや草と心の夜れ友
名月や今宵楚子入あすの川
居らりるあまきかたらとふの月
名月やよまれ誘ふる清乃色
月の花や流の戲まの犬の眉
あふ夢されとせまらと浮の月
人喜の喜の文のきわらう
葉ハ只古き荒さく山踏か
笑満で荒く一はよひとく菊

狭小なる菊はかきとや八日月
あつらひし暑さ忘れて葉かさね
群れも菊を静らふるれ危
うら根ハ張ふさくや死くれを
大吼す叶寺いまさうそ紅葉
極めるそ障のもら葉か
漲の及不送とらめか子紅葉か
眼と秋とほつるはつたアか
病れハ人子起すれ危秋のうら
何もさ故もそれゆき言の秋

秋至

花の秋ちるを三十日れ月夜

又月ならぬ花の入りこられて

五津と母の文も折より生力矣

むくひ火や定ぬ画の母を千世

家刀自々母をみおれ

新もやや来た在せ一人と客

心これきる人の才中よりされ

さめて月やてもけ世も憂うら

雨後

月ハ水帯の傍小見る夜うら

浪士と浪ふかあを

葉いろく何ぞ心まきり

田家

寺行く世稻穂うらふ春の菊

函のト飛せし

去き秋や定てとまなちりて

万句與行の歌子へ

番船や一舟万人とむよれ日

時源秋之部終

秋
壘

